

## できるだけ早期からのリスニング対策を！

旺文社 教育情報センター 16年11月

### 今後の展開

以上、試験当日の取材や、本誌独自のアンケート調査の集計結果などから、センター試験リスニング試行テストの概要をつかんでいただけたと思う。

アンケート調査で判明した通り、全般的にレベルは易しめと感じた受験者が多かったが、易しい問題からかなり難しい問題まで、実験的に出題されている。センター試験では通常、各科目とも受験者の平均点がだいたい6割となるように作題されているといわれ、リスニングテストでもその方針は踏襲されよう。したがって、18年度の本番では、試行テストの受験者の成績に基づき、問題レベルは調整されるものとみられる。

ヘッドホンの音漏れや、機器使用の説明に時間がかかりすぎるなど、機器類や実施方法・手順に関するクレームもいくつかあった。こうした課題に対しても、大学入試センターでは試験終了後に受験者に対してアンケート調査を行っているので、その集計結果を踏まえ、本番ではある程度解決されよう。

### 先生の意見

今回の試行テストを受けるには、基本的に受験者個人のエントリーだったが、生徒への周知や勧め方など、高校によって対応にかなり温度差がみられた。その中で、生徒に積極的に受験を勧めた先生2人を取材した。

東京都の私立高のA先生は、今回の出題について「文の長さそのものは、現在使用しているリーディング教材と比べて短いので、聴くことに関しては問題ないと思います。しかし、そこから解答を導き出すステップはまた別物です」と語る。そこで、A先生の高校では「通常のオーラルコミュニケーションの授業とは別に、リスニング対策の授業を3学期からスタートさせる予定」という。そして「身近な目標としては英検が適しているので、その対策に重点を置いてリスニングの訓練を行うつもりです」と、英検の有効性を強調している。

また、京都府の私立高のB先生は、リスニングテストについては、従来の対策で十分対応できるという。「まず本校では、週1回のネイティブによる授業を導入しています。また、NHKラジオ講座『英会話 レッツ スピーク』を自宅で聞くことを義務付け、学校では別売のCDを利用した小テストを、毎週課すようにしています」と、リスニング対策を披露。ただし「受験直前になれば、センター試験対策の一環として、同形式のリスニングトレーニングを行いたい」(B先生談)とも。

## 受験生へのアドバイス

本誌読者に対しては、前出の A 先生から「英検（準 2 級～3 級）の受験が、ふだんの授業との違和感もなく、一番の対策となるでしょう。それと、洋画や洋楽に親しむなど、日常的に音声としての英語に慣れることが、高得点への近道でしょう」、B 先生からは「まずは、聴く機会と量を増やすこと。授業中に流れるテープや CD をきちんと聴いたり、NHK のラジオ講座を聴いたりするなど、毎日 5～10 分でも聴く習慣をつけてください」と、それぞれアドバイスをいただいた。ただし、大切なのはリスニングに対する姿勢だという。「受験のためだけでなく、語学を自分で身に付けていくという心構えが大切です。パソコンと語学は、大学に入った後にこそ必要な素養なのですから」（B 先生談）。



このように、英語リスニングについては本番直前に集中して勉強するのではなく、早期から日常的に訓練しておく必要がある。そして何より、今回受験しなかった高校 2 年生は（3 年生も念のため）、必ず、大学入試センターのホームページをチェックし、年内には公表される予定の試行テストの問題と音声を、実際に体験しておこう。入試は 1 点を争う。早く知ると知らないとの違いが、後々の合否に影響するかもしれないのだから…。

そして、高校の先生方にとっては、英語の授業を“構造改革”するチャンスかもしれない。前出の B 先生は「今回のセンター試験での導入により、50～60 万人の受験生がリスニングの勉強に励む“きっかけ”を持ちます。このことは、高校の英語教育にとって、大きなターニングポイントとなるでしょう」と語る。このチャンスを逃さず、長期的視野に立ち、バラエティに富んだ授業を展開すること——この結果、生徒の学習意欲を高め、授業、ひいては校内の活性化につながる可能性もある。“早めの対応”は受験生だけでなく、高校現場にこそ求められているといえよう。